

野呂弘昌もすばらしい甲虫の標本をもってきた。彼は洪水時の荒木上から、あるいは海浜の砂地から特異な種を  
あつめている。しかし、これらの貴重な資料が単なるコレク  
ションに終わり、まともな記録として公表されな  
ければ世のモチ腐れ以外の何ものでもない。また、報告  
も固定の正確さがなければ資料としての価値はなく、か  
えって混乱を招くばかりである。

この度「但馬むしの会」が発足し、同好の士が互いに  
連繋を深めながら協力して郷土但馬の昆虫についての知  
見を積上げようとすることは誠に喜ばしいことである。  
そしてその具体的な礎石としてこの会誌が創刊されるこ  
とを心から祝福するとともに、会の発展にともなう会  
誌が充実して単なる同好誌ではなく公式の研究発表誌と  
しての實力をもったものに育てあげてほしいと願うもの  
である。「継続は力なり」これは柏原高校にいた頃、大  
先輩松山確郎先生から教えられたことばである。いった  
ん出版した以上、石にしがみついて継続する執念があ  
れば必ず實力はついてくるものなのである。

(たかはし ただす・豊高教諭)

＊

＊

＊

## 我々の課題

### 石田達也

但馬の生物はまだまだわかっていない。そう思う。ま  
ったく何がでてくるか、本当に訳のわからないところだ。  
ぼくは現在、鳥を主に観ているので、鳥の話になるが、  
豊岡市六ツ[ろっぽう]田園\*が今のところ西日本で唯一のガン  
(マガン)の「繁殖果地」になっていたり、標高わずか1,300  
メートルの山頂付近に、みづう信州など

\*内山川を、市街地の東方に広がる田園地帯。

の高山帯でしか見られない鳥<sup>\*</sup>が——恐らく繁殖していると思われるが——いたり、米ノ山や扇ノ山がイヌワシの重要な繁殖地であったり....

しかし、こんなことは鳥に限られたことではない。高校生の頃スミレをやっていたが、ブナ林下などの山地帯に生えているナガハシスミレが城崎の温泉寺のあたり——一標高わずか10メートル前後——にあたり、扇ノ山には中部地方の亜高山帯に生える種<sup>\*\*</sup>が、ひどいところでは、ブナ林の林床をおおってしまうほど繁茂していたりして、まったくびっくりにしてしまった。

平野が少なく、交通の便も悪いため、京阪神地方からそれほど離れていないのに一つの隔絶された地方となつて、自然の環境が極端な形で壊されずに割合残っているのだろう。

だが、そんな但馬にも様々な人工自然が作られつつある。ゴルフ場だとか、山地をつつまる観光道路——林道なんて、大ウソもいいところだ——だとか、そういった人工自然の作られたところには、もう住むことのできる生物というのは限られてくる。但馬全体が、いつかは人工自然だらけになってしまうかも知れない。人間が生きて生活していく以上はいつかはそうなるだろう。それはまだずっと先のこともかも知れないし、あるいはすぐ明日のことかも知れない。

但馬にはまだまだ秘密がいっぱいある。こんなおもしろいところをほうっておく手はない。しかし、個人の力で調べられることといったら、たかが知っている。やはり、ある程度組織の力が必要だろう。今まで、バラバラにやってきたことを統合していけば、かなり空白は埋まるだろう。

ことは急を要するかも知れない。これまでに集めたデータが過去のデータとかなり違ううちに何とかしなければ

<sup>\*</sup> コルリ、マミジロ、ハリオアマツハメなど。これらの鳥は夏鳥で中部以北へ渡る際に西日本を通過することかあるが、扇ノ山で繁殖しているかどうかはまだ確認されていない。

<sup>\*\*</sup> ツルタチツボスミレ（テリハタチツボスミレの変種）

ならないだろう。することは山ほどもある。個々の人がバラバラに集めたデータを一つにまとめ、その上で空白地帯を埋めていったり、新しい疑問をみつけてそれを調べたり、それこそ蝶に限ってみても、まだまだ分かっていないことの方が多いだろう。アサギマダラが海岸に群舞しているという。何故だろう？ギフチョウとカンアオイ類の分布とはどういう関係にあるのだろうか？スギタニルリシジミの分布はどうなっているのか？トチノキとの関係は？杉ヶ沢の開発でゼフィルスたちはどうなるのだろうか？日本海側のウスバシロチョウは、何故太平洋側の個体より黒っぽいのだろうか？モンシロチョウとスギタニルシロチョウとの関係はどうか？サトキマダラヒカゲとヤマキマダラヒカゲとの関係はどうか？氷ノ山や扇ノ山の山頂付近にはどんなな蝶が生息しているのだろうか？

まだまだ研究テーマはいっぱいある。興味はつきないことだろう。

さあ、この但馬の自然を、但馬人の手で調べていこうではありませんか。

(いしだ たつや・学生)

＊

＊

＊

## むしの会発足 にあたって

足立義弘

今迄に何回か集まり、話し合った結果、どうにか今年には当会を発足させることになりました。今後、会の活動をすすめるにあたって、今迄の経験と反省のもとに、自分なりの考えと会に対する期待を記しておきます。

まず、会として行なっていく以上、ある程度の目的意識をもってする必要があると考えます。いろいろな人が集まってくるために、それぞれの考え方のくいちがいから、会としてはまとまりのないものになる危険性が生じ